

平安時代寺院聖教と古記録の研究

代表者 東 館 紹 見

宮 崎 健 司

頼 富 本 宏

赤 尾 栄 慶

杉 本 理

堅 田 理

はじめに

本研究の目的は、大谷大学博物館所蔵の『春記』長久二年（一〇四一）二月条（記主藤原資房へ一〇〇七〜一〇五七・重要文化財・卷子装・二巻）の紙背に書写されている聖教の検討作業を通じて、古記録（日記）本文と紙背聖教との関係を整理・研究することにある。

二〇〇七年度（平成十九年度）の共同研究においては、本学博物館所蔵『春記』の紙背に書写された東密僧寛有の著作『顕密立教差別記』と本文との関係をめぐって、特に二〇〇四年度、二〇〇五年度に行われた本研究所における共同研

究「平安時代古記録の研究」(代表者 佐々木令信)で得られた研究成果に導かれつつ、諸写本の調査、関連諸史料の収集・検討はもとより、文献史学、国語学、仏教学等の成果を援用し、総合的な検討を進めてきた。

右の研究の経緯とその成果に基づき、本報告では、まず『顯密立教差別記』の著者寛有とその周辺、特に家系と法系に注目し、著名な東密の学匠としての彼の人物的・社会的な背景を提示し、併せて彼の著述が多く記される東寺本『春記』紙背の聖教の成立と内容について、主として京都国立博物館所蔵本を中心に検討し、こうした聖教類が書写された背景について検討・報告することとしたい。

一 「顯密立教差別記」著者寛有の家系

東密僧寛有は、生没年不詳であるが、『血脈類集記』では、藤原有家(？ー一一三三)の息であり、仁和寺兼意付法の弟子として石山寺において伝法灌頂を授けられ、「柿御園少将阿闍梨」と号した旨の記載が存する。²⁾

また、平安時代の貴族社会の家系を知る手がかりとなる『尊卑分脈』には、寛有の父である藤原有家について、父中納言藤原能季・母若狭守源信房女とある。能季の父は、藤原道長の息頼宗であり、したがって寛有は道長の玄孫にあたることになる。なお、『尊卑分脈』の、有家の息で正四位下少納言能忠の箇所には、母右衛門佐知綱女とある横に、「世号柿御園少納言」と記されている。³⁾ 寛有の兄弟にあたるであろう能忠が「柿御園少納言」と呼ばれていたことにも併せて注意しておきたい。

では、次に寛有の家系の内、祖父藤原能季・父藤原有家について具体的に検証を進めてみたい。

寛有の祖父藤原能季(一〇三八ー一〇七七)は、先に触れたように、藤原道長の息頼宗の五男である。その官歴は、『公卿補任』康平七年(一〇六四)条に詳しい。それによれば、従五位下に叙爵されたのは、後冷泉天皇の時代、永承三年(一〇四八)、能季十歳の時のことであった。この比較的早い年齢での叙爵には、当時内大臣であり、後冷泉天皇の東宮時代

に東宮大夫を務めていた父頼宗の政治的影響力を無視することはできないであろう。その後の能季が、永承七年、一四歳で早くも昇殿を許され、侍従に任官しているところにも、同様の影響がうかがえよう。

ここで、後冷泉朝における藤原頼宗の政治的位置について言及しておきたい。頼宗の父道長の子孫は、その室である源雅信女倫子の系統と源高明女明子の系統の二つに大別され、さらに倫子の系統では、長子頼通の系統と次子教通の系統が存在した。道長の三男である頼宗は、このうち明子の系統の第一子、すなわち筆頭の位置にあった。藤原能季が叙爵した永承三年の段階において、明子の系統では、頼宗が内大臣であったのははじめ、頼宗の息男のうち、兼頼・俊家が権中納言、能長が参議に、そして頼宗の弟能信が権大納言に、それぞれ就任しており、一つの政治勢力を形成していた。『春記』の記主藤原資房は、彼らとは別の系統に属するが、同記の永承七年四月四日条において、藤原頼宗の子兼頼・俊家・能長の三兄弟を名指して次のように非難している。

件兄弟三人当世之凶乱人也、天下無不嘆息、京中惡事出自此三人、凡近來枝葉之權門各相凌之内、尋常之人已失處、⁴藤原資房の個人的性格や記述姿勢を割り引いて考える必要があるが、藤原頼宗・能信兄弟を中心とする政治勢力が、後冷泉朝において、一定の政治的影響力を保持していたことをこの記事は示しているといえよう。寛有の祖父藤原能季が貴族社会の仲間入りをした時期には、このような状況が存在していたことを確認しておきたい。

藤原能季は、天喜四年（一〇五六）從四位下、康平二年（一〇五九）正四位下を経て同四年には二十三歳の若さで少納言兼藏人頭に任官、同六年に近衛中将兼藏人頭となっている。⁵当該期一般に、藏人頭への昇進ルートには、実務への練達⁶が要求される弁官という官職を経て任官するルート（この場合、藏人頭は「頭弁」と称された）と、近衛中将を経由して任官するルート（この場合は「頭中将」と称された）の二つがあった。能季のような公達の場合、右のうち、弁官ルートではなく、近衛中将ルートをを経て藏人頭に任官するのが通例であった。しかしながら、能季は、先に見たように、少納言に在任のまま藏人頭となり、その後、近衛中将兼藏人頭となっているのである。こうした能季のといった異例ともいえる昇進

ルートの背景には、藤原頼通、同教通、同頼宗・能信という三つの政治勢力が互いに拮抗していた後冷泉朝における政治的状況が想定されよう。

その後も能季は順調に昇進し、康平七年（一〇六四）、二十六歳で参議近衛中将（宰相中将）となって公卿に列し、翌八年には父藤原頼宗の譲りを受けて従三位となり、延久四年（一〇七二）には権中納言に昇任している。また、能季の官歴において留意されるのは、彼が近江介・近江権守を歴任している点である。その息有家（寛有の父）も近江介を務めているが、後述するごとく、このことと、孫に当たる寛有の近江での活動との間には関連性が想定されるのである。

このように公卿として活動していた藤原能季であるが、承暦元年（一〇七七）、三十九歳に至って、当時流行した疱瘡のために急逝していることが知られる。⁷ 能季が中納言在任のまま死去したことは、次に述べる息有家の官途に影響を与えたものと思われる。

続いて、寛有の父に当たる藤原有家について検証してみたい。前述の藤原能季には、『尊卑分脈』に確認できるだけで、有家・実覚（園城寺）・季覚（延暦寺）・宗覚（興福寺）・陽伊（園城寺）の五人の男子がいる。実覚・季覚の詳細は不明であるが、宗覚は南京三会の已講を経て大僧都となり、寿永三年（一一八四）入滅、陽伊は法橋上人位となり天承二年（一一三二）に入滅している。⁸ 能季の息男のうち、有家を除くすべての者が出家し僧侶となっていることは、能季が中納言在任のまま三十九歳で急逝したと何らかの関係があるといえるかも知れない。

藤原有家の経歴について考えるにあたり、まず注意すべき史料は、『朝野群載』巻第七に所収される、長治三年（一一〇六）閏二月二十六日付で有家が提出した「罷右近衛少将職状」である。⁹ これによれば、有家が近衛少将に任官したのは承保二年（一一〇七五）のことであった。同年における父能季の年齢（三十七歳）、及び当該期の貴族社会における官位昇進の慣例等を勘案すれば、有家の右の職への就任は十代のこととしてよいであろう。

有家の近衛少将就任の時点で、父藤原能季は従二位権中納言の地位にあった。この段階での有家には、父の後見の下

で公卿の一男としての順調な官途の昇進が予想されたといえよう。ところが、前述の通り、翌々年の承暦元年、父能季は抱瘡のため急逝してしまうのである。その後の有家は、応徳三年（一一〇八）二十歳代で従四位上に昇叙されてはいるものの、¹¹官職は長治三年（一一〇六）に辞職するまでの間、近衛少将に止まっている。先にも触れたが、一般に、藤原頼宗―能季という上達部（公卿）の家格の貴族は、近衛府ルートでの昇進により、五位少将―四位少将―中将を経由して、藏人頭兼近衛中将となり、さらに公卿へと累進するというのが通例であった。¹²しかし、藤原有家は、四位右少将を経て寛治二年（一一〇八）に四位左少将に昇進して以後、官職は少将より進むことはなかったのである。能季の息男として、ひとり官界に留まった有家の昇進にも、兄弟たちの出家の事情と同様に、やはりそこに父能季の急死の影響を少なからず考えるべきではなかろうか。

藤原有家の官歴において、上記の事情の他に特に注目したいのは、寛治三年と長治元年（一一〇四）の二度にわたり近江介に就任している点である。¹³有家の父能季が近江介・近江権守を歴任したことは先に触れた通りであり、寛有の父祖が、二代にわたり近江介・近江権守に任官していたことは、寛有が近江を活動基盤の一つとしていた理由を考える上で、示唆的事実といえるであろう。

『顕密立教差別記』を著した寛有は、近江石山寺で伝法灌頂を受けている。また、同じく寛有の著書『四種大乘浅深記』（『春記』紙背、京都国立博物館所蔵）は、その奥書に永万二年（一一六六）光明寺で著した旨が記録されているが、神田茂氏によれば、この光明寺は近江に存在したとされている。¹⁴さらに、寛有の著作『大日経秘要抄』ならびに『秘密十地研鏡抄』の写本は、近江石山寺に残されているのである。¹⁵こうした寛有をめぐる種々の事実は、彼の活動基盤のひとつが近江国であることを示していると考えられる。そして、このことを可能としたひとつの要因として、寛有の祖父藤原能季・父有家が、近江権守・近江介を歴任することを通じ、同地に何らかの地縁的な人的交流や社会的基盤が存在していたことが考えられないであろうか。

次に、藤原有家の近衛少将としての活動について記しておこう。彼の活動は、藤原宗忠の日記『中右記』、藤原忠実の日記『殿暦』に散見する。留意すべき点として、ここでは、摂関家の藤原忠実宅にしばしば伺候していること、¹⁶ 忠実の子忠通が初めて昇殿を許され参内する際に随伴していること、¹⁷ 忠実が上表を提出した際に、有家がその使者を務めていること、¹⁸ 忠実の大叔母寛子（藤原頼通女）が、四条東洞院の有家宅に一時的に滞在していること、¹⁹ 以上の四点を挙げておきたい。こうした事実からは、有家が摂関家の忠実と主従的なつながりを結ぶことを通じて、官途昇進を目指していたことがうかがわれるのである。

しかしながら、長治二年（一一〇五）の除目において、藤原有家は左少将から右少将に降格となっている。こうしたこともあつてか、翌三年一月の「月奏」によれば、有家は、長治二年十二月には一度も勤務していないことが知られる。²⁰そして翌年、先にも用いた「罷右近衛少将職状」を提出し、病気を理由に右近衛少将職を辞任しているのである。²¹

それ以後の藤原有家の動静は、史料から確認できなくなるが、『中右記』長承二年（一一三三）五月二十八日条に「已講宗覚依有家入道夜前卒去不参也」²²とあることから、有家は出家入道後、長承二年に死去していた事実を確認することができる。

以上、本節では、寛有の祖父藤原能季・父藤原有家をめぐる検討してきた。ここまでの成果により、『顕密立教差別記』の著者寛有について、彼の人物的・社会的背景を理解することができたように思う。次節では、東寺本『春記』紙背聖教と寛有について検討してみたい。

二 東寺本『春記』紙背聖教と寛有

本節では、東寺本『春記』紙背聖教と寛有をめぐる諸問題について検討してみたい。

大谷大学博物館所蔵の『春記』（一卷・卷子・重要文化財）の紙背聖教をめぐるのは、長らく寛有の『大日経秘要抄』と

されてきた。しかし、近年村上泰教氏の研究により、同じ寛有の著作『顕密立教差別記』であることが判明している。²³ 本報告では、かかる近年の研究成果に導かれつつ、東寺本『春記』紙背聖教に関して、寛有との関連を中心に述べてゆきたいと思う。

東寺本『春記』は、同史料の諸本のうちでも最古のものともみなされる平安時代末の写本で、現在、宮内庁書陵部に八巻、京都国立博物館に三巻、大谷大学博物館に一巻が、各々所蔵されている。

それぞれの紙背であるが、まず、宮内庁書陵部所蔵の八巻においては、第一巻に『秘密曼荼羅正妙抄』（著者不明）、第二巻から第八巻に『大日経秘要抄』第一―第五（寛有著）が記されている。また、京都国立博物館所蔵の三巻には、第一巻に『秘密十地研鏡抄』（寛有著）、第二巻に『如法尊勝法支度文書』（勝賢筆写）、第三巻に『四種大乘浅深記』（寛有著）が記される。大谷大学博物館所蔵『春記』紙背聖教については、前述した通りである。

東寺本『春記』の紙背をめぐっては、何よりもまず、そのいずれもが東密系の聖教に属するものであり、就中、その東密僧寛有の著作がその大半を占めている点に最大の特色があるといえよう。

寛有の家系及び人物的・社会的背景については前節で明らかにした通りであるが、彼の法系及び事績については、『血脈類集記』に兼意付法の弟子であり「柿御園少将阿闍梨」と号したとある他、『伝燈広録』にも「広沢論匠」等とあり、²⁴ また海恵の『密宗要決抄』第三にも彼の真言教学の一端が記述されている。²⁵ これらの記述からは、彼が、多くの教学的な著述を残し、学匠として高い評価を得ていた人物であったことが知られる。ただ、現在のところ、同時代における古記録など諸史料の中に未だその名を見出し得ておらず、生没年をはじめ、基本的な事績についてはなお不明な部分が多い。今後の研究に期待するところである。

次に、東寺本『春記』紙背の聖教をめぐる課題について報告を進めていきたい。就中、本報告では、数度にわたり閲覧・調査した京都国立博物館所蔵『春記』三巻を中心に述べることにし、以下、巻ごとにその内容を紹介しつつ考察を

加えてゆくこととする。

第一巻は、縦二八・七センチ、長一七九〇・三センチ、界高二四・八センチ、全三十五紙。本文には長暦四年（一〇四〇）八月三日より三十日条を収める。紙背には、巻末より第三紙前半にかけて、『秘密十地研鏡抄』が書写されている。実際に調査したところでは、用いられている訓点が御室仁和寺系統の円堂点であることやフォント点の形状などから、従来言われてきた通り、平安時代末の書写と見てよいことが明らかとなった。²⁶ いずれも著者寛有の置かれた状況と矛盾せず、当該期の寺院史料として極めて高い価値を持つものであることが改めて確認された。さらに、『春記』本文と紙背『秘密十地研鏡抄』の書写年代について、さほど時間的懸隔がないこと等の成果を得ることができた。

この『秘密十地研鏡抄』について、村上泰教氏は、滋賀県石山寺所蔵の平安末写本の外題に「寛有作」とあること²⁷、また『密宗要決抄』という史料に、寛有の著作中に真言十地に言及したものがあつた旨の記載が存すること等を根拠として、その著者を寛有に比定している。²⁹ 妥当な見解というべきで、二〇〇五年度の「平安時代古記録の研究」班の調査段階において既に寛有の著述として比定されていた諸聖教に加え、本『秘密十地研鏡抄』もまた寛有の著述であることが判明した点は、これら東寺本『春記』の特徴・性格を明確にする上で、より大きな手がかりといわなくてはならない。

京都国立博物館所蔵の第二巻は、縦二七・九センチ、長八一三・八センチ、界高二三・八センチ、全十五紙。本文には永承七年（一〇五二）四月条より六月十日条までを収めるが、尾欠である。巻末より一五紙にかけて、鳥羽上皇の院宣案や勧修寺寛信の請文・巻数（祈禱の報告書・注進等、如法尊勝法関係の支度文書二〇通が書写されており、続けて「已上雑々日記等院宣書状随見及書／留了為後代尤可備亀鏡者欤／勝賢」との奥書がある。ここに書写者として名が見える勝賢（一一三八―九六）は、藤原通憲（信西）の息で、醍醐寺座主や東大寺別当を歴任した当該期を代表する東密僧である。実際に調査したところでは、本文に関しては、その筆致などから複数の人物により書写されていることが明らかにあった。このことからして、勝賢の奥書は、校閲・監督者の意味で書かれたのではないかと考えられる。

この「如法尊勝法支度文書」（以下、「支度文書」と略称する）については、まず醍醐寺勝賢が如何なる目的で書写したのが論点として設定されよう。以下には、かかる論点で議論を進める前提として、いくつかの問題について整理してみたい。

これについて、第一に、彼を中心とする僧侶のグループが、『春記』を料紙として、どのような史料を「雑々日記」（前掲勝賢奥書の語）として参照し書写を行ったのかという問題がある。

本「支度文書」の内容として中心となる部分は、勸修寺寛信（一〇八五―一二五三）が主宰した如法尊勝法の修法についての記述である。この寛信主宰の如法尊勝法について詳述した著作としては、既に勝賢の師実運（明海）による著作『秘藏金宝鈔』巻二の存在が知られている。³⁰ 実運は、この寛信主宰の如法尊勝法に実際に仕出ししており、また一方で、勝賢がこの『秘藏金宝鈔』を所持していた事実も史料から確認される。³² そこで、この聖教と勝賢筆写の本「支度文書」とを比較検討してみると、注進の部分などにおいて字句が異なる箇所が多く、直接、『秘藏金宝鈔』を参照し作成したとは言い難い内容であることがわかった。

『秘藏金宝鈔』は、聖教の中でも、一定の主題に沿って記され、一個の作品として完結している「抄物」と称される範疇に属する。これに対して、修法の支度記録等をそのままの形で記し置いたものは、以下に記すように「日記」と称されていた。例えば、本「支度文書」と似通った性格を持つ史料に、四天王寺に所蔵される「如法尊勝法御修法日記」がある。これは、本「支度文書」と同様、過去の修法に関する注進や巻数が収められ、書写の典拠が最後に記録されているものであるが、これが「日記」と称されているのである。さらに、この「如法尊勝法御修法日記」には、その典拠の一つとして「覚洞院僧正御記」という聖教の名が挙げられている。「覚洞院僧正」とは、本「支度文書」の書写者である勝賢のことであるが、彼が修法の注進・巻数を記録したのもまた、「御記」（「日記」の尊称）と呼ばれているのである。これらの事実からは、平安末から鎌倉期にかけて、修法の支度について記録したものが、「日記」（或いは「御記」と

称されていたこと、さらにこれらの内容が次第に参照される形で継受されていたことが知られるのである。

このように考えてくれば、勝賢自身が「支度文書」の典拠として「雑々日記」という表記の仕方をしている以上、その典拠に、抄物のみではなく、修法の支度記録であるところの「日記」にあたるものがなくてはならないと考えられる。これに関して、鎌倉時代の東密僧頼瑜が著した著作『秘鈔問答』³⁴の記述に注目してみたい。同書には、如法尊勝法の項目が立てられ、問答形式で同法の内容が展開されているが、その典拠として頼瑜は、前掲『秘藏金宝抄』等の抄物とともに、「勸修寺寛信法務記」なる如法尊勝法の修法の日記を挙げているのである。

上川通夫氏によれば、小野流の範俊（一〇三八―一一二）の始修にかかる如法尊勝法は、その孫弟子にあたる前述の勸修寺寛信により文書聖教化されて、小野流の修法として確立したとされる。³⁵こうした事実を踏まえるならば、醍醐寺勝賢は、如法尊勝法について「支度文書」を記し、自らが聖教化する段階で、寛信の時代に同修法が文書聖教化された歴史的事実を認識していたがゆえに、「勸修寺寛信法務記」を「雑々日記」の一つとして書写の参考とした可能性も考えられるのではないだろうか。³⁶いずれにしても、この「支度文書」は、聖教の形成過程に関する種々の興味深い事実を読み取ることが可能な内容を持つものであるといえよう。

なお、東寺本『春記』のうち、著述ではなく、支度文書の形式を取っているのは本巻のみである点について付言しておきたい。東寺本『春記』においては、いずれの巻においても、紙背聖教よりも本文が先に記されたことが既に判明しているが、この本文に注目すると、上述のように、本巻には、尾欠とはいえ、永承七年四月条より六月十日条までが記され、次に述べる第三巻には同年七月条より九月条までが記されている。すなわち、本巻については、紙背聖教の性格に関しては他の巻と異なるものがあるにせよ、その料紙として用いられた『春記』本文としては、他の巻との繋がりが強いものであることがわかるのである。もとより、いずれの紙背聖教についても東密系のものである点においては共通しているものであり、今後、その内容を総合的に検討してゆく中で、本「支度文書」が書写の対象となる聖教として選ば

れた理由も明確になるものと考ええる。

最後に、京都国立博物館所蔵の第三巻についてであるが、本巻は、縦二七・七センチ、長六九二・六センチ、界高二三・九センチ、全十四紙。本文には永承七年七月条より九月条が記され、紙背には『四種大乘浅深記』を収める。第十四紙の紙背には、「四種大乘浅深記 寛有作」とあり、第十三紙より聖教本文が書き起こされる。末尾は第四紙にあたり、「永万二年夏比於光明寺造書了／金剛仏子（梵字二字）作」と奥書が記される。実際に調査したところでは、右に記した「永万二年（一一六五）」以下の文章が、本奥書の可能性があること、第一巻・第二巻と同様に、本文と紙背との間に書写の時間的懸隔が殆ど窺われないこと、等の知見を得ることができた。以上の点から、少なくとも『春記』本文が永万二年以前に書写されたものであること、紙背聖教の著者が寛有であることを、改めて確認することができた。

また、以上に述べた京博所蔵本のいずれにおいても、紙背聖教の末尾に白紙部分の多いことが確認でき、聖教の書写を前提として『春記』本文が切断された可能性があるといった知見も併せて得ることができた。

以上、本節では、京都国立博物館所蔵『春記』について、その紙背聖教をめぐる現段階で得られた知見を踏まえ、検討を加えた次第である。

おわりに

以上、二節にわたって、東寺本『春記』紙背をめぐり、その中心を構成する寛有とその紙背聖教類について、現段階で明らかになった点を報告した。

従来、不明な点が多かった、寛有の人物的・社会的背景、さらには、京都国立博物館所蔵『春記』紙背聖教の成立と内容について、新たな種々の事実を明らかにし、これに基づいた考察を進めることができた。本研究で明らかになった種々の事実は、『春記』本文と紙背聖教との関係を考える上でも様々な示唆に富むものといえよう。

ただ、こうした、紙背に東密系の聖教を持つ古記録が何故成立し、どのような経緯で東寺において伝世されてきたのか、この基本的な疑問点については、種々の可能性が考えられるものの、なお明確な答えを出すには至らなかった。これまで知られなかった種々の事実が更に明らかになった今、かかる疑問点について、一層注意深く考察する必要があると考えている。今回の共同研究で得られた成果に基づき、本学所蔵『春記』を含む、平安時代の寺院聖教と古記録の問題について、今後とも各方面・分野からの総合的な研究を進めていきたい。

註

- 1 代表者 佐々木令信「平安時代古記録の研究」(『真宗総合研究所研究紀要』第二四号、二〇〇六年)
- 2 『真言宗全書』第三十九卷
- 3 『尊卑分脈』第一(『新訂増補国史大系』)
- 4 『春記』永承七年四月四日条
- 5 『公卿補任』康平七年条(『新訂増補国史大系』)
- 6 玉井力「院政」支配と貴族官人層(『日本の社会史』第三卷 権威と支配 岩波書店、一九八七年)のち、同氏『平安時代の貴族と天皇』岩波書店、二〇〇〇年)
- 7 源俊房の日記『水左記』の承暦元年八月一日条に、「後聞、中納言能季卿、右京大夫藤原通家朝臣、信濃前司伊綱、依庖瘡逝去」とある。
- 8 『尊卑分脈』、『僧歴綜覧』(笠間書院、一九七六年)
- 9 『朝野群載』巻第七 公卿家(『新訂増補国史大系』第二十九卷上)
- 10 註9前掲史料、『近衛府補任』第二
- 11 『同右』第二
- 12 註6前掲玉井論考
- 13 『国司補任』第五

- 14 神田茂「春記の伝本に関する考察」(『史学雑誌』第五十六編第一号、一九四五年)
- 15 石山寺校倉聖教第十函、石山寺口決第六函
- 16 『殿暦』康和三年十月二十七日条、同五年九月二十一日条(『大日本古記録』)
- 17 『殿暦』康和五年十二月九日条
- 18 『殿暦』康和四年九月十七日条
- 19 『殿暦』天仁二年十月七日条
- 20 『朝野群載』第五 朝儀下 所収「殿上月奏」
- 21 註9 前掲史料
- 22 『中右記』長承二年五月二十八日条(『増補史料大成』)
- 23 村上泰教「寛有作『顕密立教差別記』について」(『密教学研究』第四十号、二〇〇八年)
- 24 註23 前掲村上論考
- 25 『真言宗全書』第十七卷
- 26 大阪大谷大学教授 宇都宮啓吾氏のご教示による。
- 27 石山寺口決第六函
- 28 註25 前掲史料
- 29 註23 前掲村上論考
- 30 『大正新脩大藏經』第七十八卷
- 31 『覚禪抄』如法尊勝上(『大日本仏教全書』)
- 32 「抄第六」(『仁和寺御経蔵』第一一八箱)、「密宗血脈抄」(『真言宗全書』第二十五卷)
- 33 杉橋隆夫「四天王寺所蔵『如意宝珠御修法日記』・『同』紙背(富樫氏関係)文書について」(『史林』第五十三卷第三号、一九七〇年)
- 34 『大正新脩大藏經』第七十九卷
- 35 上川通夫「史料紹介『如法尊勝法院宣等
保延六年』——大覚寺聖教」(『古文書研究』第四十号、一九九五年)のち、同氏『日本中世仏教史料

36 論『吉川弘文館、二〇〇八年』
『覚禪抄』如法尊勝においても、「勸修寺寛信法務記」がしばしば引用されている。